

である。

## 私の引揚げ記録

東京都 野口敏子

### 一 私の生い立ち

私は、大正九（一九二〇）年七月に札幌市で野口文蔵の娘として、五人兄弟姉妹の四番目、女では次女として生まれました。成長してから聞いたことですが、父も母も、それぞれの生家は北海道古宇郡泊村で鱧漁業を営んでいた網元でした。母が、浜続きであった父の所に嫁入りしたとのことです。

その後、御殿を建てるほどであった豊漁が終わりを告げて、鱧がばったりと捕れなくなり、野口の家もご多分に漏れずに大きな影響を受けました。加えて祖父が急死し、父は若くして家を相続することになりました。祖父の跡を継いで、網元としての仕事をしばらく続けておりましたが、漁が不振ではどうにもなら

ず、漁業関連の企業にサラリーマンとして転身し、家長としての責任を背負うようになったということです。

勤めの関係で、浜を離れて小樽市に住まいを替えることになり、私は小樽市立緑小学校に入学しましたが、二年生になった五月に、子供の教育を第一と考えた両親が、教育環境が整っている東京で勉強するのがよいと、一家を挙げて東京に引っ越しすることになり、私は、武蔵野第一小学校に転校しました。

武蔵野第一小学校を卒業したのち、当時の東京府立第四高等女学校へ入学、さらに奈良女子高等師範学校へと進学しました。

奈良女子高等師範学校在学中に、国は戦時対策として学生の修学期間を半年短縮する政策を打ち出しました。私たちは、昭和十七（一九四二）年九月に高等師範学校を卒業することになりました。そのころ、父は既に中国上海市の企業に勤めていたので、私は父のいる上海の居留民団立第二日本高等女学校に教諭として赴任することになりました。当時の上海にはいろいろ

な国策会社が設立されていて、学校にはそのような会社に勤務している方々の子女が大勢入学していて、私には他の先生方と共に、お預かりした子女の教育に情熱を傾けました。

その間、父と一緒に住んでいましたが、第二次世界大戦の戦況が激化するにつれて、上海での生活も次第に戦時色が濃くなってきました。

## 二 北京への転居

そうこうするうちに、上海も米軍機の空襲を受けはじめ、昼夜を問わず危険にさらされるようになりました。空襲が激しくなるにつれて、私たち教師は、自分の専門教科の授業だけに打ち込んでいればよいという状態ではなくなってきました。学校の警備、警戒という責任が加わり、夜、空襲があると急いで登校しなければなりません。そのときは、防空頭きんに鉄兜、おまけに家には帰れず学校に泊まり込む状態です。それに備えて当座の衣服や食糧品を詰めたリュックサックを担いで駆け付けなければならない。空襲といえば深夜でも、寂しい真つ暗な道を歩いて登

校しなければならぬのですから大変でした。生徒は生徒で、軍の指示によって、傷病兵が着る白衣の縫製作業や小型の弾薬製造といった奉仕活動に追われるようになりました。その作業中にも空襲警報が鳴ると、教師は生徒を誘導して防空壕に退避させるなど、学校は授業どころではなく、まさに軍需工場といった様相が色濃くなってきました。

父の仕事の関係もあり、国家への「戦争協力」をより積極的に実行するためには、上海よりも北京の方がよいという状況になったので、私は北京の民団立高等女学校への転勤を強く希望していました。今まで新卒の若手教員として、心を込めて指導してきた生徒や、先輩、同僚の教員に別れを告げて、上海駅から北京への列車の旅に出ました。昭和二十年の夏のことでした。

この列車旅行では、線路の破壊をねらう敵機の空襲に何度も遭遇しました。敵機が来襲すると、機関車は客車を切り離して機関車専用の防空壕へ退避し、乗客は切り離された客車から飛び降りて、線路の両側に広

がっている高梁畑に蜘蛛の子を散らすように散開し、敵機が去るまで息を殺していました。何の障害もなくすらすらと目的地に行ける現在では考えられないような難儀な旅でした。このようにして終戦一週間前の昭和二十年八月七日に北京に到着してほっとしました。

知人に頼んでおいた北京での住まいは、折からの厳しい住宅難でなかなか見つからず、取りあえず父の知人宅に落ち着きました。しかし、父の友人たちが持っていた「戦争の情報」では、どうも戦況はよくなく、北京に居を定めて勤めを始めるといった悠長な状況ではないことが、次第に明らかになってきました。どうも、何か大きな戦況の変化があるのではないかと考えるようになりました。

そして八月十四日には、北京の日本大使館から、「明日、在留邦人の主だった者は、北京飯店に集まるように」との連絡がありました。翌日、父の知人の方々と共に北京飯店に集合して、天皇陛下の玉音放送を聞くことになりました。玉音放送は、終戦を伝えるものでしたが、放送の音質が悪くて内容が分かりづら

いものでした。

### 三 終戦直後の様相

放送を拝聴した私たちは、いずれも肩を落として重い足取りでそれぞれの家路に向かいました。今まで日本人が経験したことのない敗戦国民として、これからの生活はどうなるのか、日本に帰ることができなのか、まことに暗い、寂しい、悲しい思いでいっぱいでした。

敗戦で現地住民とは立場が全く反対になったのですから当然と言えば当然ですが、帰宅の途中に出会った現地住民の私たちを見るまなざしは、昨日までとはまるで違って、かつて私どもが感じたことのない、人を刺すような、実に名状しがたいものでした。それまでの現地住民は、日本の企業などに雇用されて、日本人の指導のもとに生産活動を行っていたので、どちらかといえば現地住民自身が劣等感を持っていて、自分の国に住んでいながら遠慮がちな生活をしているといったところがありました。それにはもちろん、国力の相違、国際的な立場の違いがそうさせていたのですが、

一夜にして立場が逆転したわけです。

今度は、日本人が小さくならなければなりません。食糧の確保も難しくなりましたし、交通の手段として利用していた洋車ジャズカーにも気をつけていないと、乗っている間に何が起こるか分からず、常に身近には危険がつきまとうようになりました。後で知ったことですが、当日、北京飯店に集まって玉音放送を拝聴した職業軍人が、戦争責任を強く感じたのでしょうか、ホテル内で拳銃で自決した方が何人かいたということでした。こんな暗い話を聞いていて、戦争に敗れた日本にはどんな苦難が待っているのか、どんなふうに変わっていくのか、先が見えないだけに不安を強く感じました。そして、北京にいる十万人の居留民一人一人が、この大きな事態の変化に対応して、新しい日本を育てていかねばならないと思いました。

#### 四 城外への追い出し

邦人は、昨日まで国家の保護のもとに軍需企業に勤め生産に励んでいましたが、工場も設備も共に接収されてしまい、一挙に仕事を失いました。そして日本人

は、北京城内に住むことも許されず、城外の原野に仮設小屋を建てて住まうことになりました。建築材料が少ないので小屋は屋根だけ、といっても屋根の材料は「ござ」です。壁を作る材料もないので、防空壕のように床を掘り下げて「ござ」の屋根をかぶせるしかありませんでした。床も「ござ」です。寒さが厳しくなると、狭い壕の中でストーブをたいて暖をとるしかありませんでした。

生活環境の急変から、体調を崩す子供や、婦人が多く、死亡者も増えてきました。一方、北京から遠く離れた市外や、張家口、宣化などに住んでいて、婦人と幼児だけの家族や夫が現地召集されて男手のない留守家族などは、命令により着の身着のまま無蓋貨車に乗せられて、北京市内の日本人小学校や中学校に詰め込まれました。時が経つにつれて、さらに奥地に住んでいた人たちも次々に北京に送り込まれました。この人たちの世話も、居留民団や最初から北京に住んでいた家族の婦人団体が、いろいろと対策を立てて乏しい物資を分け合うなどしました。必要な食糧をどう調達

するか、劣悪な食、住環境の中で衛生をどう保つか、組織としても助け合いましたが、それぞれの家庭でも、友人、知人がお互いに情報を集め、引揚げまでの間どう過ごしてゆくか検討し、実行しました。

## 五 報復行動の心配

一番心配されたことは、被占領国の国民として長い間押さえつけられていた現地の人たちが、日本人に対する反感から報復行動を起こすのではないかということでした。日常生活の中で日本人に対する嫌がらせや、一部の人たちが集団で日本人の住居に押し掛けて物品を奪ったり、暴力を振るったりしないかなどが心配されました。そんなことが、考えれば考えるほど数限りなく出てきました。一夜にして生活の基礎、日常の行動や戦争に対する意識内容に一大変革が起きたわけです。

## 六 生きるための努力

敗戦時の在留邦人は直ちに、収入を得る職業に就くことを禁止されました。敗戦前夜まで大会社の幹部職員として国の戦争遂行のために日夜努力をしてきた日

本人は、すべての職業を失って収入を得る道が無くなってしまいました。

このような状況で日々の生計を図り、引き揚げるまでの生活を維持するための一方法として多くの青壮年の男性が行ったのは、中国でいう「ボンボン屋」、日本のにいえば「不要品回収業」です。まず、邦人居住地をくまなく回って不急不要の品、例えば和服・洋服・道具類といった物を買集めます。合図として右手に竹ひごを持ち、左手に小さな「つづみ」のような物を持って打ち鳴らして歩きます。こうして買い集めた品々は、北京飯店前の大広場に積み上げられました。随分と広い広場でしたが、そうした品々でいっぱいになりました。日本婦人の高級和服、丸帯、紋付、羽織袴、高級紳士服、軍服、靴、カメラなど、ありとあらゆる品物が山のように集まりました。これを現地の中国人が物色して買う、といった一大市場が出現しました。このようにして日本人は、不用高級品を売って引揚げまでに必要な現金を少しでも手に入れようとなりました。

前にも書いたように、敗戦後、在留邦人は北京城門外の木一本生えていない原野に追い出されて、そこに住むことだけが認められていました。そして防空壕のような穴を掘り、屋根は、アンペラや芋の茎で編んだむしろのようなもので覆って、掘った土の床にむしろを敷き重ねてその上にじかに寝るといふ生活でした。

もとより家具も調度品もありません。時は移り、冬へと季節が変わると、この土壕の中央に簡単なストーブを置き一家全員で暖をとり、その火を利用して炊事をするという厳しい冬を過ごしました。そんな状態で、赤子や老人、妊産婦などで体の調子を崩した人々には本当につらい冬でした。

私は幸いなことに城内に住むことができて、安定した生活を続けていました。それは当時、中国には西洋医が非常に少なかったので、医師だけは城内で病院の経営を続けることができたからです。父の知人に医師が多かったので、私はその方のお世話になっていて、中国風や西洋風のコンクリート造りの病院で不自由なく過ごすことができたのは不幸中の幸いでした。

病院には、医師・薬剤師・看護婦さんなど勤務している人々や、中国人、日本人を問わず、風邪をこじらせた人や結核の人など、入院している患者が大勢いました。私は医師の医療事務を手伝ったり、邦人の学校が休校になっていましたので、医師の子供さんの幼稚園の女兒と小学校一年生と三年生の男の子、合わせて三人の家庭教師として学力の低下を防ぐことにも協力していました。

#### 七 教育者としての経験

毎日引揚げを待つて苦しい生活をしていたある日、久々に北京市内に日用品を買いに出掛けたときに、偶然でしたが、かつて上海第二高等女学校に勤務していたときの生徒であった、中国人のA子さんとお会いしました。彼女は家庭の仕事の関係で、私が北京に来る数カ月前に北京に移って行ったことを思い出しました。当時、上海の学校には台湾、韓国、中国などいろんな国籍の生徒が同じクラスで勉強していました。私は私の方針として、国籍の違いを意識せず差別無く生徒の指導に当たり、明るいクラスづくりを心掛けていまし

た。彼女は大変に聡明で明るく、愛らしい少女でした。私や同級生みんなと仲良くしていましたから、日本の敗戦という状況の変化ともかかわりなく、この偶然の出会いを喜んで、当然懐かしい思いのこもった言葉のやりとりが交わされるものと思えました。

しかし、目を合わせた彼女の顔には何の感情も表れず、上海の学校のことなどは制服と共に捨てましたと言わんばかりに、民族服をびたりとまとい、「私は戦勝国の人」というような硬い表情を崩しませんでした。そして挨拶の言葉を交わすでもなく行ってしまいました。私は、私の思いとあまりにも違っていましたので、しばしあっけにとられていました。あんなに楽しい師弟関係であったのにと、あ然として彼女の後ろ姿を見送ってしまいました。心を込めた二年間の学級経営の中で見せた愛らしい少女の態度と、今、私に見せた、ごう慢とも見える態度とのあまりにも大きな変化に驚くと共に、国と国との立場の変化が、師弟関係にも及ぼした変化の大きさを目の当たりに見て、人間個人の努力のむなしさを痛感しました。しかし、この

出会いに見たぎこちない変化、これを私は、戦勝国民すべてがこういう態度とは考えたくない、このことは、子供の持つ個性、家庭事情、そして親たちの教育によるものであろうと考えました。また、国家間の大きな変革で、私たちが今まで生徒との間において誠心誠意行ってきた精神教育というものもろさ、弱さをつくづくと感じました。

私は、彼女はかつて過ごした少女時代を「戦時」、「戦後」そして「国家」という時代背景等を含め、どのように回想しつつ成長したのかというのを時折思い返すことがあります。こういう残念な出会いもありましたが、同じときに上海の学校に在学し一緒に学んだ各国の生徒さんから年賀状をいただくことがあります。それぞれ国籍の異なる父祖の国に帰って生活を送っていますが、上海時代に縁のあった女性たちからのやさしく、暖かい、心のこもった年賀状に接する度に、私が彼女たちにとどのような感化を与えたのだろうかと思ひ返すことがあります。そしてやさしい年賀状をくださる女性に育ってくれたことに大きな喜びを感

じています。

優しい人、憎しみを露骨に表す人、それは個性・家庭環境・社会環境あるいは国民性の相違などによって子供の成長にも大きな変化、変革を及ぼすと思います。が、国家的な変革が個人に与える影響は、私の想像以上に大きいものであると思います。彼女らがそれぞれの置かれた環境の中で、心豊かな人生をもち、国際人としての教養を身につけて豊かに精神的な成長をなし、いつの日にか巡り会ったときに、互いに慈しみあえる人間でありたいと心より望んでいます。

引揚げを待つ間の生活は、だんだんと困難の度が加わってきました。主食、野菜、魚、肉類などを自由に購入できる市場に行くことも不自由になって、現地人の協力を得てやっと手に入れるといった生活でした。

私は上海から北京へ転勤するときに、衣類、寝具などを送り出しましたが、終戦という大きな混乱に巻き込まれ、治安上の問題もあって、その荷物が北京駅に到着しているかどうか確かめることも、受け取りに行くこともできないありさまでした。仮に受け取ったとし

ても、大部分は北京に残したまま引き揚げることになるであろうと想像していたので、あきらめることができませんでした。私は、学生時代の書籍、写真、さまざまな衣類など思い出の品々も、父の衣類などもすべてあきらめて、現地の方々が利用してくださればと思いました。だから、日常の必要最小限度のものは北京で購入して引揚げの準備を進めました。

年明けの昭和二十一年三月に引揚げの予定と知らされましたので、リュックサック一つに自分の持てる範圍の衣類や毛布などの寝具、それにいり米や肉の加工品、缶詰など十日分の食糧、飯ごうなどの炊事道具を、一緒にいた人々の意見などを参考に準備を進め、引揚げ集合の日を待ちました。

#### 八 北京出発

引揚げは、列車での移動から始まりました。北京から列車で、集合拠点の一つである渤海湾に面した塘沽<sup>タングク</sup>まで行きました。北京からは三十人程度の小集団に分かれて集団生活をしていました。塘沽では中国検査所で、貴金属、写真など持ち出し禁止品のチェックを受



けなければなりませんでした。検査を受ける順番が来るまでの十日余りの生活は、北京城外の小屋と同じもので、土の上にアンペラを敷いてごろ寝をしました。

そして毎日が持ち出しを禁止されている写真や不要品の整理処分に費やされました。この間の食事は相変わらず貧しいもので、配給されるおにぎりや各人が携行してきた非常食を食べて飢えをしのぎました。北京と同じように寒さが厳しく、不衛生な環境の中での生活がたたって、体力の弱い幼い子供たちは、栄養失調や消化不良から体調を崩しました。母親や周りの人々の必死の努力や祈りにもかかわらず、次々に大切な命を落としてしまいました。亡くなった子供の多くは、父親が現地召集されているなどで一緒に避難しておらず、母親や幼い兄弟、そして年老いた祖父母だけしかいませんから、同じグループの男子数人が面倒を見ました。遺体は衣服か布にくるんだだけで、とてもお棺とはいえない小さな木箱に納めて野辺の送りをしました。

この貧しいお棺は、とても墓地とはいえない小屋の

近くの小高い丘に埋められ、母親と思われる女性の供える野の花に飾られて、涙の別れをしていました。私たちは、こんな悲しい別れに何度となく出会いました。そのときには言うに言われぬ悲しみと、悔しさを胸に抱いて合掌しました。

## 九 引揚船の中で

このようにして引揚船を待ちましたが、乗る船の順番が来るまでは待つことの連続でした。普通、船は細長いものという一般の概念とは違って、引揚げのための輸送船は、むしろ楕円形に近いお椀のような形で、喫水の浅い貨物用の船でした。私も約三百人余は、寝具や毛布などを持って、船倉に押し込まれました。

荷物を持って並んで立ったそのスペースだけが、身を置く場所といった狭さでした。したがって横になって休むこともできず、隣に座っている人同士で、互いに寄りかかって睡眠をとるようなありさまでした。やっと日本に帰れる船に乗れたという喜びもつかの間で、船内の食事は、それはそれはひどいもので、海水で塩味をつけたとしか思えないような竹の子、ワカ

メ、ワラビなどの入った薄い味噌汁と雑炊のような主食が、毎日少々配られ、はじめはのども通らないほどでしたが、自分が持ってきたいり米も干し肉も底をついていたので、それで飢えをしのぐよりほかはありませんでした。体力のない老人、子供、病弱な人々は、消化不良などのため、祖国上陸の日を待たずに、船中で力つきて死亡しました。その弔いは、陸上の弔いと違った、一段と悲しみの深い別れ方で、水葬という形がとられました。

遺体は布にくるまれて、舷側から水葬されました。船は別れの汽笛を鳴らしながら、ゆっくりと現場を三周します。遺体は、悲しみにくれる遺族や関係者に見守られながら、ゆっくり海に沈んで行きました。

敗戦、引揚げの悲哀をつくづくと感じた船の旅が続きました。

塘沽を出発してから十日余りを経て、青くかすむ九州の山々を、水平線のかたに望むことができたとき、やっと愛する祖国に帰れたという思いがこみ上げられました。船倉にいる人々を甲板に呼んで、共に喜

びの声をあげました。

#### 十 内地 上陸より東京まで

私は父と二人で、長崎県の諫早市の海岸近くにあった引揚げ者の臨時収容所に入りました。収容所の入り口には、白衣を着た職員が立っていました。発疹チフス予防のために虱や蚤を駆除するといって、米軍の指図で、日本人の医師や看護婦によって、頭のとっぺんからつまさきまで、全身真っ白になるほどにDDTという粉薬をかけられました。

この収容所で二日間を過ごしました。ここには内地各地の地図や写真がはってあって、各都市の空襲による戦災の様子を知ることができましたが、親類や知人の詳しい安否までは分かりませんでした。父と私は、取りあえず以前住んでいた家と、祖母や姉、おいなどが任んでいるはずの東京の杉並の家を訪ねることにしました。

諫早の収容所では、わずかでしたが、「交付金」と目的地までの「鉄道切符」が交付されました。東京までの引揚げ列車は、引揚げ者とその荷物で身動きもできな

いほどで、車内の床いっぱいにおかれた荷物の上に体を横たえる人もいました。列車は、今から思えば本當にのろのろしたスピードで、あちらこちら止まったりしながらも、一步一步東京に近づいて行きました。列車の窓からは、空襲で破壊されて焼け野原となつてしまつた村々や市街地が次から次へと現れ、行く先の東京が、どんなに変わり果てているのか心配で、打ちひしがれた気持ちで、胸がいっぱいになりました。

横浜を過ぎて品川が近づいてきてからも、街中の破壊状態はすさまじく、誠に悲惨なもので、見渡す限り一面の焼け野原でした。そして大きなコンクリートの建物の残がいが所々に立っているだけで、あつちの一つこつちの一つと焼けトタンを集めて造つた掘つ立て小屋が見られるだけで、四月の真昼というのに歩いてゐる人影もまばらで、誠に寒々とした風景でした。

東京駅周辺も焼け野原が広々と広がっており、いさう惨めな思いが胸を締めつけました。中央線で東京駅を出ると、関東平野は山一つ無い広大な平野ですの

切る如くに連なっているのが望まれるだけで、家がどこに残っているのかと思われました。中野、高円寺と電車が進んで行つても、住宅らしいものはほとんど見られず、空襲による被害のひどさを実感しました。

住まいが西荻・吉祥寺・小平などにあつた叔父、叔母たちが、今も以前の所に住んでいるのかどうかは、そこに行つてみるまでは分からないのが実状でした。

西荻窪の駅に着いて周りを見回してみても、瓦礫の間にポツポツとわずかに焼け残つた家があるだけでしたが、幸いにも我が家は無事でした。

狭い家ですが、受験勉強をした私の部屋も仏壇も、そのままでしたので、まずご先祖様に無事の帰国を報告し香華を手向けました。

祖母・姉・おい・叔父・叔母たちの中には、空襲で家を焼かれてしまつた人もいましたが、死んだ者はなく、けがもせず、そろつて再会することができて一同大喜びをしました。早速、みんなで少ない物を寄せ集めて料理を作り、父と私の帰国を祝い大歓迎をしてくれました。

## 十一 引揚げ後の生活と就職

北京から塘沽、そして無事日本へ引き揚げる事ができた喜びはひとしおで、取りあえず雨露をしのぐ家があっただけでも幸せと思いましたが、戦災を受けた人にもまして、引揚者の生活は衣食住すべてに大変な苦勞があり、帰国の翌日から私どもの上に大きく覆いかぶさることになりました。

言うまでもなく、東京は戦後大変な就職難でした。早速生活のために就職活動を始めなければなりませんでした。戦後の生き甲斐として、できれば新しい時代の教育活動に携わりたいと考えていたので、早速に出身学校を訪ねてみました。私の出身校、都立第四高等女学校も、ご多分に漏れず八王子の大空襲のために全焼してしまい、仮校舎での教育が始まっていました。そして、かねてお教えを頂いた先生方にお会いして、教育関係に就職することについていろいろとご指導を頂きました。

上海第二日本高女時代に、一緒に勤務していた福家先生が、都立第六中学校（現新宿高校）で教頭をして

おられて、私の履歴、身元などの保証をしてくださったのは非常に幸せでした。教員の資格審査も問題なく通過し、昭和二十一年九月三十日、東京都立第五高等女学校、現在の都立富士高校に就職することができて、生活のめどがたつという安心感と、自分が生涯の仕事として選んだ教育の現場で教諭として就職できたことを何よりも有り難く思いました。職場の先輩、同僚の先生方も優れた教養のある方々ばかりでしたので、心理的にも安定した日々を過ごすことができたことを今でも感謝しています。

就職のことは解決しましたが、問題は食糧の確保でした。衣服は、引揚げのときにはほんの少し持ち帰ったもので何とか間に合わせるとしても、毎日の食糧確保の面では、農業関係に知人もない私たちには、全く困難な問題として立ちほだかりました。

食糧の配給の問題は、当時の新聞で毎日のように報道されていたように、配給が少ないうえに遅配や欠配があり、到底、必要量は足りませんでした。

学校では、「食安定協会」といった互助の組織があ

り、他の先生方と一緒に買い出しに行ったり、時間外には何を買う行列なのかも分からないままに列の後ろに並んで食糧を買ったりしました。これは、当時を知る人々にとってはごく当たり前の行動でした。

私どもは、日曜日になるとなげなしのお金を手にして、東京都下の青梅・大和・蕨・草加などに足を延ばしては、一面識もない農家に行って、野菜や芋やメリケン粉や麦や米など、売ってもらえるものは手当たり次第に買うことに時間を使いました。農作物のことなどは何も分からぬまま、少しでも食べ物を確保する努力をしました。

私の家は家族が少なく、幼い者もいませんでしたので何とかしのげましたが、家族が多くて、しかも、老人や病人や育ち盛りの子供がたくさんいる家では、さぞ大変だっただろうと思いました。今考えても、どのようにして過ごしていたのか不思議なくらいです。

私の知人が勤めていた第五高等女学校の先生が、昭和二十一年の暮れも押し詰まったころに、次のように述べられたことを今でも昨日のこのようにはつきり

と思い起こします。その言葉は、当時の日常生活がどんなに貧しいものであったかをうかがい知るものです。

それは、「せめて、サツマイモの一俵も枕辺においてクリスマスを迎えたいものですね!」と言われたことです。大学生の弟さんと、嫁入り前の妹さんと三人で生活していた先生の、しみじみとした述懐でした。先生はスポーツウーマンで、お茶の水女高師(現お茶の水女子大)に週一度研究に通っておられた学究肌の方でしたので、食生活の心配無しに研究に打ち込めたらどんなによいだろうと、敗戦後の生活が恨めしく感じられました。

## 十二 新しい職場への誘い

女学校へ就職して一年近かった昭和二十二年の夏ごろに、私の出身校奈良女高師の先輩で、東京にお住まいの阿部女史から思いがけないお話を頂きました。

「この秋から、働く人のための役所『労働省』が発足し、厚生省から独立した官庁として仕事を始めるのだが、そこに日本で初めて女性の地位並びに青少年の

労働保護のための問題を扱う「婦人少年局」が設置される。ここに、意欲を持って働こうとする人を推薦しなければならぬのだが、貴女はこの新しい仕事に就いて働く気はないか？」というお話でした。

私は上海から引き揚げてきて、一年余でやっと教諭という仕事に落ち着いたばかりで、卒業当時勤めた都立第五高女にも一年足らずしか勤務していませんでしたし、私を推薦してくださる方がおられるかどうかとも不明でしたので、どうするか戸惑ってしまいました。

しかし、阿部女史が、私の出身校である都立第四高女にも勤務されたことがあることが分かったので、前向きに考えてみることにして、しばらく時間を頂くことにしました。私もくちばしの黄色い二十代のころであり、「日本の婦人問題」が、どんな内容を持ち、どんな問題があるのか、また、日本の年少労働者の就職状況や労働環境についても何の知識もなく全く白紙の状態でしたので、お誘いに応じるかどうか判断に苦しみ、「婦人少年問題」については一から勉強しなければならぬと思いました。推薦の件は、奈良女高師の

大先輩で「少年法」の専門家でいらした宮城タマヨ先生にお願いできることになりました。

そこで若気の至りといいたまうか、何の予備知識もないまま、労働省の担当試験官の面接を受けることになりました。

### 十三 女性役人の一人となって

面接が終わって試験官から、「年少労働者の保護の問題を取り扱う、年少労働課に來ないか？」という話がありました。が、先輩の阿部さんからは、「婦人問題に」ということしか伺っていませんでしたので、このお誘いは断って婦人課を希望しました。

労働省への採用が決まり、第五高女をわずか一年で退職することになり、昭和二十二年九月三十日付で、発足間もない労働省に入省しました。第五高女は就職資格審査も厳しく、生徒も優秀な人の多い立派な学校でした。就職競争の激しい中で幸いにも採用されたのに、申し訳なく、また、残念な気もしました。

忘れもしないことですが、当時の労働省の庁舎は、竹橋を渡ってすぐ右手にあった旧近衛連隊の隊舎跡で

した。正面玄関の扉の中央上には、かつて金色に輝いていたであろう「菊の御紋章」の跡がくっきりと残っていたのを覚えています。

この庁舎の奥の方に、細長い形をした「婦人少年局」の事務室がありました。私たちは、「うなぎのねどこ」とあだ名をつけていましたが、そこに初代の婦人少年局長の山川菊栄女史が、女性役人として最高の官職に就任されて座っておられました。それまでは、女性が役人として勤めていたことはなかったのです。日本の官庁としては画期的なことでした。しかも、婦人労働問題のベテラン役人など一人もいなかったのです。この山川局長のもとに、各方面から推薦されて入省した約六十人の女性たちが、新米はやはやの役人として仕事を始めることになりました。新米役人のうえに、戦後のまったく新しい問題を抱えた役所です。で、試行錯誤を繰り返していましたが、一同は非常な情熱と誇りを持って、日本再建の大きな柱である、婦人・青少年問題に取り組みました。このようにして私はやっと落ち着いた引揚げ後の生活を始めました。

この仕事を通じて私は、戦中に上海・北京と外地で生活し、敗戦後は難民としてどん底生活を体験したことが非常に役に立っていました。

大正・昭和そして平成と、世の動きに大なり小なりもまれながら波乱に満ちた人生を送りましたが、いかなる困難にぶつかっても、あの苦しく、悔しく、悲しく、そして情けない思いをした敗戦後の中国での生活に耐えてきたという自信が、大いなる助けとなりました。

平和の尊さは、あの苦勞を通り抜けてきた者が一番分かっていることと思います。それだけに、その平和の尊さを、次の世代に正しく伝えていく義務と責任もあるのだと、しみじみ感じている今日です。